



琴と土笛

弥生時代には大陸から新しい楽器の文化が伝わり、弥生人は新たな音色を手に入れますが、青谷上寺地遺跡からは土笛と琴が出土しています。

土笛

中国の陶埙（土笛）の流れをくむもので、弥生時代の成立段階に北部九州から近畿北部にかけての日本海沿岸地域に、稲作文化とともに伝わりましたが、その後しばらくして姿を消します。卵形をした中空の土製品であり、上端にある吹き口に唇を当てて吹きます。胴部正面に4孔、背面に2孔の指孔があり、この孔を押さえることで音の高さが変わります。演奏すると鈍く柔らかな音色がしますが、これを聞いた弥生人はどのように感じたことでしょうか。青谷上寺地遺跡からは8点の土笛が出土しています。



土笛

琴

神意を尋ねる祭りで用いられたようで、「古事記」の仲哀天皇・神功皇后の条で、天皇が熊襲退治に際し、神の声を聞くために琴を鳴らす話が登場します。

弥生時代の琴は、板作りの琴と槽作りの琴の2つに大別されます。板作りの琴は一枚の板で作ったものであり、槽作りの琴は音を増幅させるための仕組みである共鳴槽を取り付けたものです。青谷上寺地遺跡では8点の槽作りの琴が出土し



5匹の動物が描かれた側板

魚が描かれた天板

琴

ており、いずれも共鳴槽を4枚の側板と1枚の底板で組み合わせ、その上に天板を載せる構造で、天板や側板に共鳴孔を開けています。天板にサメと思しき魚の絵や側板に5匹の動物の絵が線刻されているものもあります。大きさは、概ね人の膝の上ののる程度の大きさで、他遺跡出土の琴の例と比べると小さめといえるでしょう。

天板の片側端部に削り出した突起に弦を括りつけて放射状に張り、これをかき鳴らしたものであると思いますが、弦の素材が何であったかは明らかではありません。青谷上寺地遺跡の琴は、いずれも1世紀頃(弥生時代中期後葉)に登場しますが、それ以降は姿を見せなくなります。